

■ “大学めぐり” を始めるにあたって

■ “大学めぐり” 第1回 “北海道大学” の巻

“大学めぐり” を始めるにあたって 本号より土木系学生会では“大学めぐり”を企画して、お互いに各大学の様子を知らせあうことにした。これは普段知ることのできない他校の様子を知り、自分の学校生活をより豊かにする上に有意あるものと考えからである。その内容は、学校の環境、教授陣、授業内容、実験設備、研究活動、大学祭、さらに、学生の気風、生活雑感、将来への夢、提言等広い範囲にわたるものになりたいと思う。そしてこの場を通じてわれわれ土木工学を専攻する学生が親睦をはかり、お互いの意識の向上を旨と考へた。

本号は「北海道大学」を登載した。次回以降は、全国の大学からの投稿をお願いして、この企画を盛り上げていこうと考へる。どしどし投稿していただきたい。また、個人投稿もかんげいする。字数は400字詰原稿用紙5枚程度、写真は1枚以内とする。原稿の送り先は、土木学会内学生会としていただきたい。

北海道大学の巻

1. プロローグ

真白な大地から、湯気をあげた真黒な土を見出すことができたのは、三月下旬だったのだろうか。春の訪れの遅い北海道では、5月に入るまで残雪のなごりが続いている。

春の訪れを待ちわびる心を知ってか、実に美しい姿で訪れてくる。長い雪との生活から解放され、黒い土を踏み占めるとき、まさしく春と感じたものでした。春の感慨を一層密なものにするのは、長い雪の中の生活であろうか。いまその雪の生活に入りつつある。

構内は至る所白一色の世界である。ただ灰色の空に向かって黒々としたポプラ、エルムの大木がつつ立っている。構内の中央にある工学部の建物は現在新築中であり、旧校舎の中では四年目は卒論に、三年目は製図に、二年目は移行後の感慨に浸りながらそれぞれ活動している。美しかった緑の季節を想い出しながら……。

皆、美しい春の訪れに布望を抱いて休暇前の日を送っている。

2. 本 文

なにゆえにわれわれが土木を選んだか、これはだれしも考へる問題でなからうか。土木技術者の特徴というべき点は、第一に「創造性」、第二に「公共性」といえる。前者は一般技術者が兼備しているといえるだろうが、後

者は最も国民生活と密接な関係を持ち、いかに経済的に公共物を創り出すかという点で他と異質である。また見方を変えれば、土木技術者は自己犠牲といえよう。なんとすれば、現在社会の最も憂慮すべき点は、自己中心的人間がいかに多いかということはだれしも気付くことであろう。もちろん現在の社会機構が複雑な要素の組み合わせで、自己の努力ではどうしようもないという点は論を待たない。しかし人間の本来の姿は協調性、すなわち他人への自己犠牲が備わっているのではなからうか。人間誰しも人のためになにかしてやりたいという気持が生来あるであろう。なぜこのような前書きをしたかという点、北大土木工学科は前述の姿がそのまま現われているような気がしてならないからです。この気持を一生忘れず持ち続けたい。真の土木技術者としての夢に胸ふくらませて学生生活を送っているからです。

近年土木技術者のとみの不足という社会要請により、去年から土木科は40名の増員をし、80名という大世帯となりました。学部移行当初は、この多人数が一体化できようとはだれしも予想しなかったでしょう。しかし、その心配も自然のうちに破れました。＜富める者は貧しき者に与えよ＞という格言どおり、毎日、教室のあちこちで群をなして相談、さては黒板の周囲が大騒ぎになるほど、実に頼もしい姿です。どこの大学の土木科も同じだと思いますが、北大の土木は全学部でも最も単位数が多く、忙しい毎日ですが、北大の一般学生が持つ気質のように実にのんびり、おのおの自己のペースでなんとか消化しています。これは北大のもつ環境がたぶんに影響しているように思われる。冬期休暇前の製図室は恒例の7月に行なわれた豊平川（石狩川水系の支川で札幌市内を流下）の三角測量の内業と活荷重合成桁設計で、夜遅くまで電気が消えることがありませんでした。

80 余名の多人数と講義の能率上からも、一応土木工学科を土木コースと交通コースとにわけています。講義内容はほとんど変わりありませんが、土木コースは水関係、すなわち河川、流体、ダム、港湾の講義が多く、逆に交通コースは道路、交通計画の講義が多くなっています。

北海道はその地理的条件からみても、文化的レベルはかなり劣っている点はまぬがれ得ません。しかしながら、われわれが現在受けている講義には、なんら障害があるように思われません。この紙上を借りて申しあげるまでもなく、北大の土木科は教授の優秀性をどの大学からも買われているからです。そのユニークな知識を目の前で吸収できるわれわれは、実に自負している点でありましょう。これは地理的悪条件を克服した驚異といえないでしょうか。

教授は研究の暇を見つけてはわれわれの面倒をよくみてくれます。その例は数えきれないほどありますが、その一例をあげてみると製図で遅くまで残っていると、腹がすいただろうといっは十数名を引きつけて食事に連れて行ってくれたり、測量などをやっている差入れしてくれたり、レポートの提出には標準提出日などを作ってくれたりしてまことに結構です。

土木工学科は工学部創立と同時にその発足をみ、それ以来 40 期生、千数名の先輩を送り出し、日本もしくは海外の一線で活躍している人達ばかりです。今われわれが考えなければならないのは、いかに先輩を追い、いやむしろ追い越すかという点です。現在の苦しい学校生活も、後には楽しみとなって返ってくることを期待しながら、皆んながんばっています。

ここで6月に行なわれた大学祭について少々述べてみようと思います。毎年大学祭は三年目が主体となって問題を進め、主題の提起に関する討論会が数日にわたって行なわれた結果、北海道の特殊事情、または特徴を生かして<北海道の総合開発問題>という点に焦点をあわせ、二つの分科会から追求することにしました。土木コースが<石狩川総合開発>、交通コースが<札幌市都市計画>の二つです。大学祭は年一度の開放でもあり、極力市民にわかりやすい内容を網羅しようという意図も専門的な部門なため、満足した成果があがらなかったようですが、それでも関係者が説明しまわった点はいくぶん救われた気持でした。浅学のため思うように進行せず、毎日教官室を訪れては示唆を仰ぎ、資料が不足の分は開発局、土木試験所と足を運び、何度か夜を徹した思い出

はなかなかいいものです。簡単な説明を下に示します。

(1) 石狩川に関する総合開発

- ① 北海道の河川は、なんといっても融雪流出の問題を除いては考えられず、この点を考慮して問題を究明
- ② 石狩川水系は昭和 36 年7月、同じく 38 年8月と二年相続いて 100 年洪水に匹敵する出水量をみ、これを防災学的見地から解明、これより現在施行中の金山ダム、および計画されている豊平ダムなどの多目的ダムの意義
- ③ さらに石狩川における洪水予報
現在石狩川の流出解析は貯留関数によっており、これと関連して予報上注目に値する北海道開発局のアナログ型コンピューターによるブロックダイヤグラムの解析
- ④ 今後の問題として、
内水はらん(河川改修上の問題点)、気象学にとまなう時間雨量の適格な予測値と挿入資料収集の迅速化

(2) 札幌市都市計画

- ① 昭和 60 年度における人口と都市計画の予想
- ② 冬期交通の問題点
- ③ ロードヒーティングの意義と札幌市で施工されたその写真解説

3. フィナーレ

だいぶ堅いことをいってきましたが、私達の全身が、常にこのような考えに支配されているわけではありません。月に一度ぐらい、ダンスパーティを開いて、お互の親睦をはかり、楽しくやっています。何事においても“ワック”と集団になるのも特色の一つです。これも田舎気質でしょうか。「のんびりし過ぎて社会に出てから通用しない」などといわれてもなんら気にすることなく、逆にその中に没頭して行くような感さもあります。

これも構内の美しい、のんびりとした姿に、影響されているのかも知れません。

白銀に招かれて、郊外の藻岩山に多勢でスキーに行っています。クラスの中には登山同行会、囲碁同行会、それにマージャン狂が存在し、おのおの盛んであります。

(星 清・三上 武志・記)

〔お知らせ〕

昨年夏の第1回土木系学生会報告書代金として、12冊分 1200 円の回収をみましたので報告致します。